

タイ・ソングラ湖における水辺集落の観光地化による変容の調査研究

市川 尚紀

A Survey of Transformation by the Tourism Development of Waterside Village, SONGKHLA Lake in THAILAND

Takanori ICHIKAWA

Synopsis

There is a biggest lake which is named SONGKHLA Lake in southern area of Thailand. The lake is in sea mingled with fresh water area, but the depth of the water is shallow with 1.5-2.0m. In this lake, there is KOH YO Island. In this island, they push forward a homestay business. Therefore, I surveyed transformation by the tourism development of waterside village, and I heard consciousness of inhabitants. As a result, I knew that many houses were built on the lake for two years and the environment of the village suddenly changed. I think that the environment can't continue to exist.

Keywords : SONGKHLA Lake , Waterside Village, Tourism

1. 序論

ソングラ県 (Songkhla Province) は、タイ・バンコクより南へ約 970km、マレーシアとの国境を有する人口約 125 万人のタイ最南端の都市である。もともと中国系やマレー系の人が多くいたため、双方の文化がタイ文化を通して混ざり合っていて、仏教徒だけでなくマレー・ムスリムも多い。この県の北部（北緯 7.18°、東経 100.54°）には、タイ最大の湖であるソングラ湖がある（図 1）。この湖は、淡水と海水の混じる汽水域にあり、南北 78km、東西 25km、その面積は 1,040 km² と、琵琶湖の約 1.6 倍の大きな湖であるが、水深は平均で 1.5～2.0m と浅い。また近年では、湖でのエビやスズキ、アカメなどの養殖が盛んになったことが要因で、水質の悪化が懸念されていることを、中島¹⁾や平井²⁾が指摘している。

この湖内には、昔ながらの田舎風景やマングローブの森が残るヨー島 (koh Yo Island)（図 2）という小さな

島があり、その島民は果物栽培や漁業などで生計を立てている。静かな離島ではあるが、1986 年にティンスラーノン橋（延長約 3 km）が完成して以降、半島との交通アクセスが飛躍的に便利になったことも影響して、豊かな自然環境を売りにした観光事業も展開されるようになった。中でも人気なのが、この地の水辺環境を売りものにして、湖上で宿泊できる観光目的のホームステイ事業である（写真 1）。

近年、空調設備などに頼らずに快適に暮らすための伝統的集落の文化を守りつつ、豊かな自然環境を観光事業にも利用する文化的景観の存続方法について、世界各地で模索されているところだが、この集落は、世界遺産や文化財に登録されたわけでもなく、養殖規模の拡大や観光事業への参入に関する制限がないまま、住民の判断によって急激に発展し始めており、このままでは、今のような豊かな環境は存続しない可能性が高い。

そこで本研究では、この水上ホームステイ事業の展開によって、静かな漁村集落がどのように変容しているのか、また住民はどのように考えているかを把握し、このような島嶼部に存在する水辺集落の、持続可能な発展のための有用な示唆を得ることを研究の目的とした。

なお、この集落における「ホームステイ」という言葉は、観光客が水上住宅（以下ホームステイ住居と呼ぶ）を借りる、いわゆるリゾート地の水上コテージ事業と同じ意味で使われており、外国人が民家の一間を借りて、現地の暮らしを住民と一緒に体験する形ではない。ただし、その水上住宅は現地の民家や漁師小屋など混在しており、一見すると観光客のための宿泊施設には見えない。



図1 タイ・ソクラ県

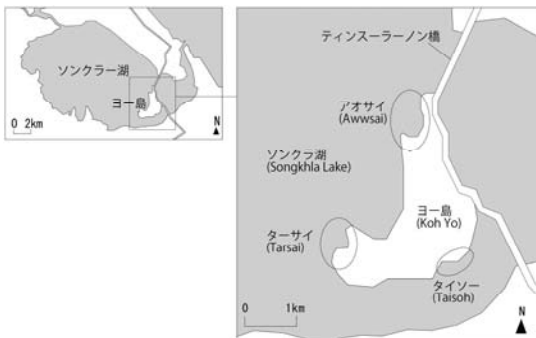


図2 ソクラ湖とヨー島



写真1 ホームステイ住居

2. 調査方法

調査は2012年8月に、著者自らがホームステイ住居に滞在し、建物実測と観察、集落の歴史に詳しい現地住民へのヒヤリングなどを行った。なお、集落内の民族博物館や都市計画事務所にも訪れたが、ホームステイ住居は最近になってはじめられたもので、建築的な資料や、行政の計画などの資料は存在しなかった。

表1 調査方法

調査期間		2012年8月21日～8月25日の5日間
調査対象地		タイ王国ソクラ県ヨー島
調査項目	集落配置	レーザー距離計
	水上住居の空間構成	コンベックス
	水上住居室内温度・湿度	データロガー付温湿度計測器
	湖の水質（COD・PH）	簡易水質検査キット
	地元住人の意識	ホームステイ経営者、漁師、レストラン経営者

3. 調査結果

3.1 ホームステイ事業の概要

ヨー島でのホームステイ事業は、南西部のターサイ (Tarsai) 集落 (写真2) と南東部のタイソー (Taisoh) 集落 (図3, 4 写真3)、そして北部のアオサイ (Awwsai) 集落 (写真4, 5) の3ヶ所で行われている。ターサイ集落やタイソー集落には、ホームステイ住居は数軒しかなく、陸地ともつながっていないためボートでアクセスするしかない。そのため、宿泊客は一度水上住宅に到着すると、翌朝、従業員が迎えに来るまでの間、住宅内で過ごすことになる。住宅内は決して広いとは言えないが、360度湖を眺めることができるので、窮屈感はなく快適に過ごせる。また、空調設備はないが、常に湖上を吹く風があるため、室内にいれば快適である。さらに、朝は美しい日の出を楽しむこともできる。



写真2 ターサイ集落のホームステイ住居



写真3 タイソー集落の水上住宅

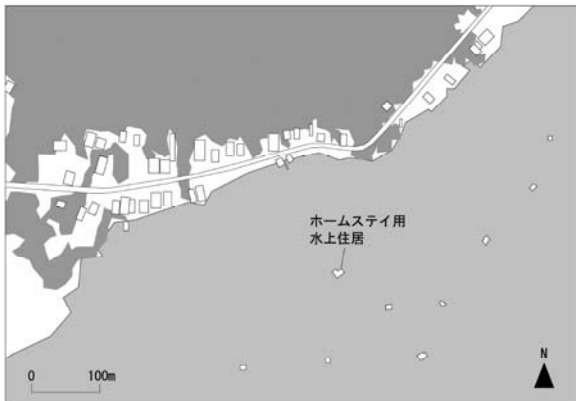


図3 タイソー集落のホームステイ住居配置図

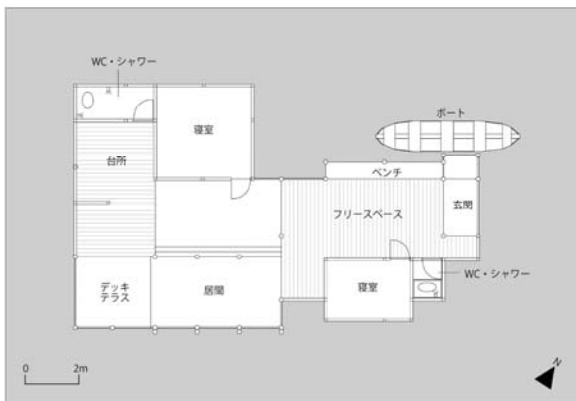


図4 タイソー集落のホームステイ住居平面図

北部のアオサイ集落には、タイソー集落やターサイ集落よりも多くのホームステイ住居が建設されている。その西側には湖面が広がるため、夕刻の美しい日の入りを眺められることを観光の売りとしている。このホームステイ事業は、各々現地住民が営んでおり、観光客だけでなく集落に居住する人口も多い。また、この集落内には島の歴史を学ぶことができる民俗博物館も建設されている。

このアオサイ集落を見下ろせる民族博物館の敷地から、ほぼ同じアングルで2012年1月と同年8月に撮影したものが写真4と写真5である。これを見ると、わずか半年間でホームステイ住居が急激に増えていることがわかる。

著者らは、タイソー集落とアオサイ集落にあるホームステイ住居に宿泊したが、他の宿泊客は皆タイ人で、従業員も英語は話すことはできず、英語併記されている店舗も少なかったことから、今のところ国内向けの事業のようである。しかし、いずれも一泊3000バーツ(日本円で約7500円)と決して安くはないが、人気があるため、この価格は刻々と値上がりしているという。



写真4 2012年1月のアオサイ集落のホームステイ住居



写真5 2012年8月のアオサイ集落のホームステイ住居

3.2 アオサイ集落の配置構成

アオサイ集落に建てられている水上の建物をフィールドワークによって把握した結果、計 71 戸の建物があることがわかった（図 5）。また、住民へのヒヤリングによって、それらの用途を確認した結果、①現地住民が住む住居（19 戸）、②ホームステイ用の水上住居（38 戸）、③その他の用途（14 戸）の 3 種類が存在することも分かった（表 1）。

ホームステイ住居の内、新設したのは 38 戸中 28 戸で、他の 10 戸は漁業用の作業小屋を改築したものだという。これは多くの集落住民が、もともと湖畔や湖上に漁のための作業小屋を所有しているからである。そのため、ホームステイ住居は、集落住民の民家や漁の作業小屋、さらに養殖のための生簀と入り混じりながら、集落内全域に分散しており、一見しただけでは、どれが宿泊施設かの判別はできない。また、経営者の民家もホームステイ住居近くの湖畔にあり、頼めばホームステイ住居内で料理もしてくれる。つまり、開発業者がまとめて土地を確保して、リゾート施設を建設する形態とは異なり、集落住民と一緒に生活する体験に近く、宿泊者はホームステイの気分を味わうことができる。

また、アオサイ集落には、橋などを使わず陸上から直接アクセスできる水上住宅もあれば、デッキ通路でアクセスする水上住宅（最大延長 125m）、ボートでアクセスする水上住宅と、様々なタイプの水上住宅が存在する（図 6 写真 6, 7, 8）。この集落では、漁師小屋をホームステイ住居に改築しているものが多いためか、陸から離れるほどホームステイ住居の数が多いことがわかる。ただし、このようなホームステイ住居は、ボートでアクセスするタイプとなり、陸上との行き来の際に、経営者に送迎を依頼する必要があるため、水上空間を満喫できる反面、宿泊者の行動が制限される。

なお、汽水域ではあるが水位変化は最大でも 50cm 程度なので、ほとんどの住宅の構造は地面に杭を建てた固定式の高床木造住宅であった。

表 1 水上住宅の分類

現地住民が住む住居		19 戸
ホームステイ住居	新築	28 戸
	漁師小屋を改築	10 戸
その他（レストラン、小売店、倉庫など）		14 戸
計		71 戸

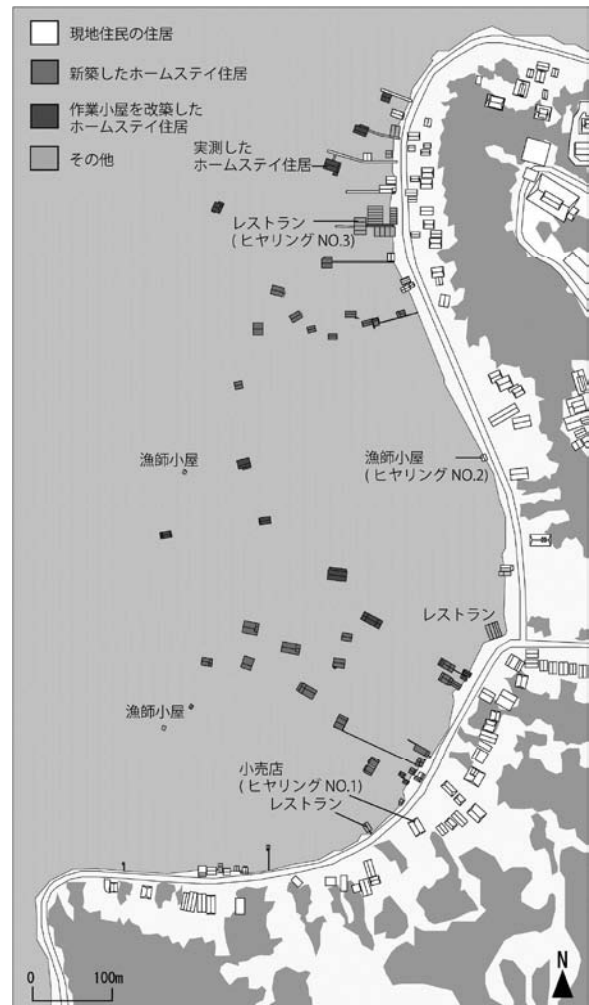


図 5 ホームステイ住居配置図

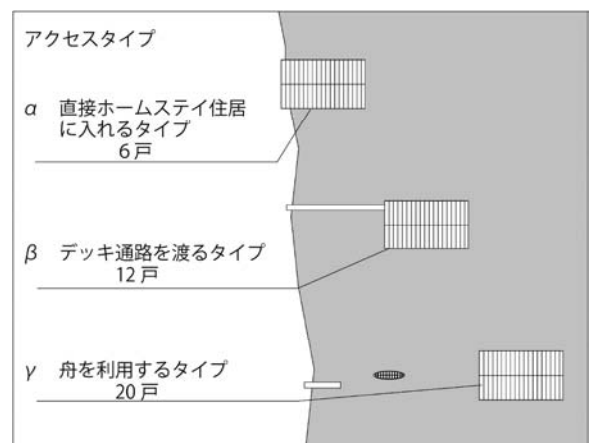


図 6 ホームステイ住居のアクセスタイプ



写真6 陸上から直接アクセスするタイプ



写真7 デッキでアクセスするタイプ



写真8 ボートでアクセスするタイプ

3.3 ホームステイ住居の室内環境

図7, 8はアオサイ集落のホームステイ住居の実測図である。この住居は、集落の最も北側に位置し、陸側には食品の小売店があり、それを経営している母娘がこのホームステイ事業も行っている。

2012年8月24日から8月26日に、ホームステイ住居のリビングの温度・湿度を測定した結果を図9に示す。

北緯約7°という環境下のため、日中の気温は30度を軽く超えていることがわかる。しかし、住宅の壁が少なく、どの方向から風が吹いても室内に取り込めるつくりになっており、直射日光さえ浴びなければ快適で、夜間はむしろ肌寒いくらいである。そのため、ここには空調設備はなく、扇風機しか設置されていない。

このようにホームステイ住居はとても快適で、一日中滞在する客もいる。そのため、住宅内にはパソコンやカラオケセットが完備されており、朝から深夜まで大騒ぎをする宿泊客もいる。このホームステイ住居のリビングスペースは建具のない開放的なつくりのため、周辺への騒音公害は避けられない。

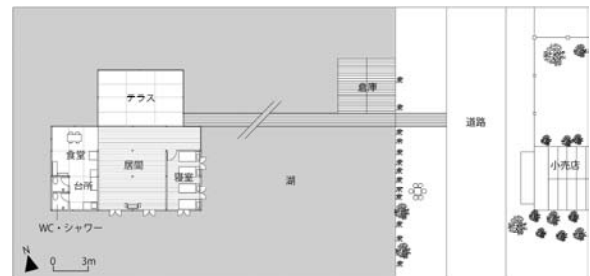


図7 ホームステイ住居平面図

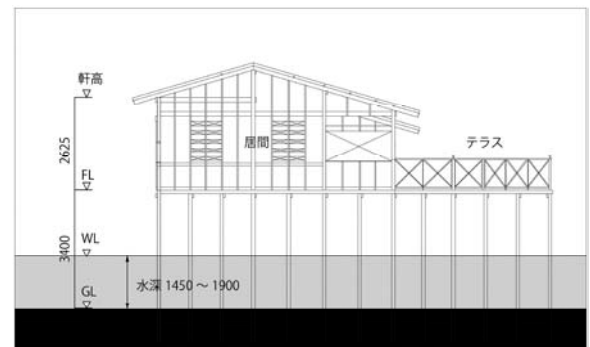


図8 ホームステイ住居断面図

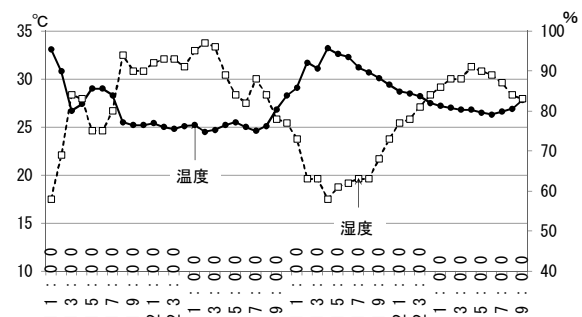


図9 居間の温度・湿度 (2012年8月24日～26日)

また、上水道と電気は陸から引いており、プロパンガスも備えているため、滞在する上での不便はない。しかし下水道はなく、生活排水(流し排水や排泄物)は、その

まま湖へ排出されている。ここで、この水上住宅下の水質を確認するため、8月24日の昼・夜と25日の朝、PHとCODのバックテストを行った。目視では透明性は低く、明らかにホームステイの生活排水による水質汚染の影響を受けているように見えるが、測定結果は、PHは6.0～6.2でほぼ中性、CODは5.0～6.0 mg/lと、あまり汚い数値ではなかった。現段階では、自然の浄化作用が勝っているのかもしれないが、下水設備が整備されないままホームステイ事業が展開されれば、湖の水質汚染問題はさらに深刻になると思われる。

3.4 集落住民の意識

2012年の調査中、3人のアオサイ集落住民に、ホームステイ事業に対するヒヤリングを行った。その内容を以下に記す。

(1) ホームステイ経営者

まず、この集落で初めてホームステイ事業に着手した男性(41歳、妻・息子2人)へヒヤリングを行った。彼は、家族ができたことを契機に、漁業の収入は不安定なので、2010年にこの集落で初めてホームステイ事業を始めたという。そして、今では2戸のホームステイ住居を持ち、約2～3万バーツ/月の収入を得ることになったという。本人たちは生まれた時からこの陸上家屋に住んでいて、水上住宅は、漁のために建てた水上の作業小屋を改築したものらしい。ホームステイ事業を始めた時は、都会のタイ人にこのような静かな田舎で、心身をリフレッシュしてもらうことが目的であったが、今は他の経営者によるホームステイ用の水上住宅が増え、水質汚染の心配や観光客の騒音などに対する他の集落住民からの苦情も聞こえ始め、この事業による集落の環境への悪影響も感じているという。

(2) 漁師

次に、養殖のみで生計を立てている男性(58歳、妻・息子2人・娘2人)へヒヤリングを行った。彼も陸上の家屋に住んでおり、水際に漁のための作業小屋を持っている。その小屋の近くに、養殖用の生簀をつくり、約3000匹の魚を育てているという。養殖による収入は、約1万バーツ/月(日本円で約2万5千円)であり、前述のホームステイ経営者の半分以上の収入であるが、この地ではなんとか暮らせるという。むしろ、ホームステイ利用者の生活排水が、漁業に影響が出ることを危惧していた。

(3) レストラン経営者

最後に、集落内で水辺のレストランを経営している男性(51歳、息子1人・娘1人)へヒヤリングを行った。彼は、約30人の従業員を抱える比較的大きなレストランを経営している。なお、このレストランは36年前か

らあるという。この地の静かな環境で、きれいな夕日を眺めることが男性の楽しみで、レストランのづくりも水辺の景観を楽しめるようになっていた。彼にとって、ホームステイ事業によるカラオケ騒音や水質汚染は迷惑で、集落の環境が汚染されるような事業は必要ないと主張していた。

4. まとめ

本報告では、タイ南部のソクラー湖ヨー島の漁村集落における、ホームステイ事業による水辺集落の変容実態を把握し、一部ではあるがそれに対する住民の意識についても知ることができた。2012年の半年間にアオサイ集落のホームステイ住居は著しく増殖し、集落が急激に変容していることがわかった。

ホームステイ用の水上住宅が増殖することで、経営者個人の収入が一時的に向上するかもしれないが、同時に集落の環境は刻々と侵されていることも事実であり、他の集落住民にとってホームステイ事業は迷惑施設にもなりうる。その一方で、伝統的な水辺集落の内部に滞在しながら、ひと時でも豊かな自然環境の恵みを楽しむ時間は都会住民にとって貴重な体験である。また、水辺集落の価値を知ってもらう機会にもなる。

このような変容が起きている要因は、様々な時代の変化が複雑に関係していると思われる。たとえば、このような小さな島が、橋によって半島とつながったことによるアクセスの改善、また都心部のタイ人の経済力が増したことで、さらに都心部の環境汚染が田舎の豊かな自然の価値を高めたことなどがあげられる。今後は、地元行政と連携して、下水道などのインフラ整備を進め、さらにホームステイ事業に対する厳格なルールを設けるなど、持続可能な水辺集落の発展に向けた方策が検討されることが望まれる。

参考文献

- 1) 中島興基: 発途上国の環境問題見聞録: ソクラー湖(タイ)とラグナ湖(フィリピン)の事例, 国立環境研究所地球環境研究センターニュース, 通巻 65号, Vol. 7, No. 1, 1996. 4
- 2) 平井幸弘: タイ国南部ソクラー湖における海面上昇の影響予測評価, LAGUNA(汽水域研究) 7, pp. 1-14, 2000. 3